

全体会議（分科会報告）

第I分科会

石橋湛山に学ぶ日蓮的精神

座 長 柴田章延

問題提起 伊藤康裕

記 録 古河良啓 吉木祥介

運 営 岩田親静 小瀬修達

一、問題提起

石橋湛山が法華經の信仰に基づいて生きた人であり、日蓮的精神を体現された人であることについては、疑いを容れません。「三大誓願」を自身の生き方の根底に据えて、信念を貫き通した人であられたことは述べるまでもないでしょう。また、自身を「日蓮門下の末席をけがす一人」と何度も明言されているように、宗教者としての自覚と宗祖を追慕する念の厚いことも看取されます。

さて、湛山が当時の時代的な制約にもかかわらず、為し得た数々の事績や提言は、大胆かつ実効的なものであって、

革新的とさえ言えるかもしれませんが。時代の先を見通した思想や論説はまさに慧眼であり、現代に生きる我々に対しても有益な知見をもたらすものであります。また、透徹した目と論理的な思考で時局を分析した数々の論考は今なお有用であり、日本で最高の言論人の一人とさえ評する人もいます。

それでは、湛山をしてそのようなことを可能ならしめたものは、何だったのでしょうか。湛山の行動様式や知見を形成し、精神のエートスの根柢を占めるものは、いかなるものであったのでしょうか。もとより、明快な解答が得られるべくありませんが、我々はそこに、宗教者としての自覚や本化の弟子としての高邁な使命感、そして宗祖の精神を承継しようとする強い意志のあることを感じざるを得ません。

しかしながら、そのような高邁な精神を、現代に生きる教師はたして持ち合わせているのでしょうか。日蓮聖人の本来の精神とはいかなるものか。そして、それを体現して生きることは、どういうことなのか。我々は、真摯に宗祖の精神をたずね、日蓮聖人が求められたものを生涯にわたって求め追い続けなくてはなりません。そして我々は、石橋湛山の生涯において、その理想の姿の一端を見出すことが出来ることでしよう。我々は、湛山の言葉や著作の中にある日蓮聖人の言葉や経文などを、ただ探すのではなく、湛山の思想や業績を分析して、「なぜ、そのように考えたのか」・「なぜそのように行動できたのか」という問いを立てることにより、その奥にある日蓮の精神や法華経信仰を見出すことが出来るはずでです。そして、湛山が湛山の立場において日蓮的精神を十二分に顕現させたように、我々も、それぞれの有する社会的役割において、日蓮の精神を体現しなくてはならないでしょう。

戦後七十年の今、社会的な構造不安や経済的な混迷は深まり、人々の倫理観や宗教観など精神的な側面も危機的状況にあると感じられる時代となりました。そのような時において、過去を背負い、現代を引き受け、そして未来を拓いて歩き出す、そうした力になるものが日蓮の精神ではないでしょうか。それは、迷いや苦しみの中にある我々に、道を指ししめず光明として現前します。我々日蓮門下の教師は、今こそ、日蓮聖人の精神をたずねて自身の根底に据

え、それを実践的に體現していくことが責務であることを、強く自覚しなくてはなりません。

分科会の一日目は、石橋湛山の事績に学びつつ、本化の弟子である我々が心に銘記すべき日蓮聖人の精神とはいかなるものか、ということについて考えたいと思います。すなわち、我々日蓮門下が共有すべき日蓮的精神の理念について、考察・討議いたします。また、理念を具体的にはたらかせるためには、直面している状況や限定条件の分析が必要です。したがって、日蓮的精神の理念を現代に生かすためには、現代において宗教者が直面する問題の分析が不可欠となりますので、具体的な問題点を挙げていくことにより、そのような点についても考察していきたいと思えます。

二日目は、前日の議論をふまえて、「現代」という時代のもとにおいて求められる日蓮的精神の様相とはいかなるものか、また、現代に生きる我々が日蓮聖人の精神を體現するためには、どのようなにあるべきか、ということについて、討議したいと考えます。それに加えて、出席者各聖の様々な立場や状況における具体的な事例や実際の布教活動への適用のあり方なども、あわせて検討することにより、理念的な議論だけではなく、現実的で実践的な内容にまで踏み込んだ、活発なディスカッションになることを目指します。

二、教育者としての石橋湛山の姿

第一分散会には、立正大学学長時代の石橋湛山より直接指導を受けたという方の参加があった。その方より語られた内容を以下に簡潔にまとめる。

同師が在学中、「立正大学新聞」という学生新聞をつくりたいと、学長であった石橋湛山に上申すると、湛山は「つくるなら毎日放課後に私の話を聞きにきなさい」と直接指導を行った。この学生新聞は、日蓮宗新聞の前身となるものであるが、石橋湛山がこの学生新聞に求めたのは、「学生が思っていること、学校に期待している要望を聞い

て欲しい、その要望を運営の参考にしたい。」というものであった。そして、たとえば女子トイレが無いことやサークルボックスの設置等の要望を伝えると、すぐにそれらの問題を取り上げて改善してくれた。つまり、石橋湛山には理屈に合ったことであれば即決する一面があったという。また、当時の立正大学では、仏教学部とそれ以外の学部には多少の対立があったが、湛山は「それらの学部がこれからの立正大学の助けとなる。共存することを考えて欲しい。」と教導し、さらには「学生の希望のあるものは何でも作った方がいい」という立場におられたので、野球部や合唱団とった仏教系以外の活動が盛んになることとなった。

また、同師は人生の処し方についても助言を受けており、「宗門の中の偉い人になるといって考えは捨てて、下の意見を聞ける実務のところまで勤めなさい。」という言葉ももらったという。さらには、湛山が友人に三大誓願を記した書を贈っていたことや、日蓮聖人の辻説法跡へ何度も通い、決意を新たにしていたことなども紹介された。教育者としての石橋湛山の姿の一端を垣間見ることができた、大変に貴重なお話であった。

三、分科会討議について

第1分科会の参加者は三十五名を数えた。分科会において出された様々な意見を大別すれば、以下のように分類できた。すなわち「Ⅰ…日蓮的精神の具現化について」、「Ⅱ…現代における立正安国について」、「Ⅲ…布教活動への応用について」の三つである。

「Ⅰ…日蓮的精神の具現化について」

参加者の多くの意見は、「石橋湛山について名前しか知らなかったが、日蓮的精神を受け継いでいたことに驚いた」というものであった。

分科会であらためて湛山の思想や数々の業績を確認すると、そこにはやはり、我々が漠然と思い描いていた日蓮的精神が生き生きと顕れているようであり、その点が参加者の関心を強く引くと同時に、自らを省みるきっかけとなったようである。「自分は日蓮的精神を受け継いでいるのか、その精神を形にして人々や社会に貢献できているのか」という声は、多くの参加者から聞かれた。討議を重ねながら指摘し得た、日蓮聖人と石橋湛山の共通点をまとめると、「人々の苦しみを受け止めて共感するという大きな慈悲」・「自分しかないという大いなる使命感と不退転の決意」・「冷静で現実的な智慧に基づく行動力」となる。

その上で具現化について、参加者が取り組んでいる活動が幾つか紹介されたのだが、その中でも関心を集めたものを一つ紹介したい。それは「半径1メートルの立正安国」という活動である。自らがお題目を伝えることが出来る範囲は半径何メートルなのか考えながら、少しずつ確実に布教を進めていき、その範囲を教師が異体同心の精神で繋げていくという活動であった。この活動は参加者の関心を大いに引いた。その他にも様々な活動が紹介され、改めて宗祖を敬慕し、行動を起こす重要性を再確認することとなった。

「Ⅱ：現代における立正安国について」

石橋湛山における小日本主義の理想と『立正安国論』を重ねて考えようという意見が多く、「石橋湛山にとっての立正安国論が小日本主義だったのではないか、それぞれの人にとっての立正安国論があるのではないか、時代に応じた立正安国論があるのではないか」というかたちの意見が挙げられた。議論はそこから集団的自衛権の問題へと発展し、参加者からは賛否両論の意見が出された。「平和を求めることは大切なことだが、何が平和であり、そのために何を言えば良いのか」が議論の焦点となり、日蓮宗の立場としては、小林順光宗務総長が示されているように、集団的自衛権反対であることにもふれた。

「Ⅲ：布教活動への応用について」

日蓮的精神というものを各人が感じ取ったのであれば、次にそれをどのようにして実際の布教活動の現場において生かせるのか、ということが参加者それぞれの課題となった。「宗祖に帰れ」とは湛山の言葉であるが、「日蓮的精神」を学びそのように生き、布教する、ということは究極の理想であることは言うまでも無い。しかし、誰にも文句のつけようもないような理想・正論は、それをただ口にするだけでは何もしていないことと同じである。したがってその理想を、各人が各人の能力や置かれた状況の中で最大限に発揮するためには、どうすればいいのか。まずはそれを考えるべきである、ということ、参加者全員で確認した。その上で、それぞれが現場での活動を貫くべきだという決意が述べられたが、そのためには使命感や決意とともに本物の知性が不可欠であり、ましてや膨大な情報が行き交う現代社会において檀信徒を導くには、本宗の宗義だけでなく、他宗派の教義や仏教全般、さらには他宗教や様々な哲学、さらにはまた宗教を離れて幅広く視野を広げて学ぶべきだということまで意見は深まった。

四、まとめ

本分科会は、石橋湛山に学ぶ日蓮的精神というものである。石橋湛山が自らの立場の上で行ってきた業績から日蓮的精神を感じとり、「我々は何ができるか」を考えて手本とするものである。石橋湛山の業績から看取できるように、宗祖にかえり、宗祖が残したエッセンスを感じとって、現代に応じた行動を貫いていくことが、我々に求められる責務であると考えられる。

第Ⅱ分科会

今、石橋湛山への希求に応えるために

座 長 灘上智生

問題提起 梅森寛誠

助言者 石川浩徳

記 録 蓮見高円

運 営 藤崎善隆 川口智徳 馬島浄圭

一、問題提起

戦後七十年を迎える今、政治や社会の情勢は動き始めている。平成二十六年集団的自衛権の行使容認が閣議決定されたが、それを土台に今、一部「戦争法」とも称される一連の安保法制の立法化の動きが著名な憲法学者らの「違憲」断定表明にもかかわらず、政権与党を中心にそのピークを迎えようとしている。その過程で「報道圧力」ともいえる事件も起きている。一方で、特定秘密保護法の適用で情報の隠蔽や操作の懸念も生まれている。教育現場に於ける統制化の動きも顕著に進み、巷では嫌韓、反中意識が煽られ（一部ヘイトスピーチを伴いつつ）不穏な空気も漂いはじめて久しい。

すなわち今、戦後七十年にして「戦争のできる国」づくりが現政権によって着々と進められているのだ。そして

「戦後七十年談話」の行方に周辺諸国を中心に強い関心が示されている。過去の植民地支配や侵略への反省とおわびを表明した「戦後五十年村山談話」が塗り替えられる懸念だ。これの中身と言動によっては、現首相の歴史認識のみならず、現在の政治外交の動きと併せ、日本の孤立化が一層高まることも憂慮される。

そこで今、石橋湛山なのだ。すなわち、湛山は、戦前『東洋経済新報』を中心に健筆を奮い、時の政府や軍部と対峙してきた。特に、小国主義の主張は光彩を放つ。第一次大戦後いよいよ拡大膨張主義が顕著になる中、湛山は経済的根拠を交えつつ、主張する。「例えば満州を棄てる、山東を棄てる、その他支那が我が国から受けつつありと考えうる一切の圧迫を棄てる、その結果はどうなるか、また例えば朝鮮に、台湾に自由を許す、その結果はどうなるか。英国にせよ、米国にせよ、非常の苦境に陥るだろう。何となれば彼らには日本にのみかくの如き自由主義を採られては、世界におけるその道徳的地位を保つを得ぬに至るからである」。実際は湛山の願う方向には進まなかったが、侵略や植民地支配が破滅を迎えた事實は、その主張の先見性と妥当性を証明することになったことは明らかだ。

また、政治家に転じた戦後は、平和主義を果敢に実行する。首相退陣後、冷戦の真っ只中であって『日中米ソ平和同盟』構想を打ち出し、晩年二度訪中し周恩来首相（当時）と会談、同構想の実現に意見を交わし、中国との国交回復への道を開いた。当時米国とは一定の距離をおいた（反米ではなく）上で平和外交を追求した史実は注目に値しよう。同時代、湛山退陣後首相となった岸信介は、安保法案を強行し米隷属を固定化させたと考えられるが、対米政策面で好対照をなしていたことも興味深い。今、その岸元首相を祖父にもち憧憬する現首相が改憲と「戦後レジーム転換」を志向し、軍事的にも米国一辺倒の姿を加速させ、その完成版が視野に入っている。

政治家やジャーナリズムの現場に於ける劣化現象の著しい昨今、その両面で奮闘した湛山を希求する声が、思想的立場を超えて聞こえてくる。今日の時代が湛山を欲しているのかもしれない。私たちはそれらに対していかに応えていくべきだろうか。

すなわち宗門出身の湛山は、その僧風教育を早くから受け、自身の背骨を生涯に渡って形作ってきた。立正安国や開目抄の精神が一貫していたことも確かだ。立正大学学長を長らく務め、同大学には『石橋湛山記念講堂』として名が冠されてもいる。

ところが現状は、宗門教師も含め、湛山の事績や思想が周知されているとは言い難い。劣化現象は政治やジャーナリズムだけではなからう。だとするならば、その原因や背景を探ることも必要かもしれない。戦後七十年が単なる周年を記する意味をこえ、今この時が戦後史に於ける正念場とも言える状況を見つめる中で、湛山を生み出した宗門の近現代史を俯瞰しつつ未来に活かす道を求めていきたい。

敗戦時に於いて「実に日本国民の永遠に記念すべき新日本門出の日」「更生日本の前途は洋々たるものがあること必然だ」と湛山が述べ、実際に「更生日本」を築いて七十年、今私たちはどこに向かおうとしているのかを議論していきたい。

二、分科会討議について

一日目

先ずNHKの放映した、知恵泉「反骨のジャーナリスト石橋湛山の発信術」のDVDを視聴し、その後梅森上人より発題を受けて、討論を行った。

NHK知恵泉「反骨のジャーナリスト石橋湛山の発信術」

（内容の要約）

- ・ 湛山は社会に声を上げる時に、感情論ではなく、データで語った。
- ・ 湛山は言論自由は言論機関が自ら勝ち取るべきであると考え、数々の対策を取る事で、社会に声を挙げ続けること

を可能にしていた。

・政治家としては一貫して冷戦構造の打破を目指し、様々な批判がある中でも断固として訪中を実行し、日中共同宣言の発表に漕ぎ着け、後の日中国交正常化に繋げた。世界は動かすことができることを示した。

(番組のコメンテーターの意見)

湛山のジャーナリスト時代をみるとデータ主義者のように思えるが、政治家としての活動をみると、その根底には熱い信念がある事が感じられる。

理想を目指す情熱的な人だが、同時にリアリストであった。

「中国は怪しからん」などという発言は、非常に言い易く、自分が正義になったように思える気持ちがいい行為である。しかし、石橋湛山は一貫して、そのような言い易い言葉でものを語らず、徹底的に現実を分析した結果に基づいて判断した。

湛山は、将来世界平和を脅かすのはナショナリズムであろうと予言している。ナショナリズムのぶつけ合いは、何ら生み出すものが無い。愛国心は大事であるが、過度な愛国心は、日本に不利益をもたらす。我々は湛山のように、それを数字やデータで語れるようになればいけない。本当の愛国心があるならば、日本が尊敬される国になる方法を訴えなければならぬ。

戦って勝つことが幸せではなく、お互いに利益を得られる状態になる事が、幸せなのではないだろうか。

湛山のように、一人であつても発信し続けていきたい。

討論

・先の大戦は、アメリカや中国が悪いのであり、日本に責任は無い。あれは、自衛の為の戦争だった。日本が戦争を

- ・引き起こしたとか、諸外国に迷惑を掛けたなどとは言って欲しくない。
- ・集团的自衛権は、やらざるを得ない。石橋湛山の平和主義は理想論で、現実難しい。
- ・自分が殺される状況なら捨戒し、不殺生戒を捨てて戦っていい。
- ・集团的自衛権は個別的自衛権ではないから、他国の戦争に巻き込まれかねない。
- ・立正平和運動など言うが、具体的には何もしていない。
- ・無関心なのが一番だめ。戦争を体験した世代が居なくなった時に後に伝えることが大切。
- ・湛山は、宗門教育の中で育った。現代の日蓮宗の教育システムを見直し、湛山のような人物が育つ教育システムの構築が大事。
- ・戦争はしたくない。しかし、もし自分の家族がやられそうになったら、私は手を出す。他国に舐められない為に核兵器だって持ったらしい。
- ・湛山の根底には、日本だけの平和ではなく、世界の平和という視点があった。世界の平和という観点から、平和の主張をすべき。
- ・湛山の志を腹にすえて前に進みたい。
- ・七十年かけて日本はアメリカの属国になっていった。
- ・我々の八割は戦争を知らない。尊い犠牲の上に今の世の中があるのは忘れてはいけない。
- ・立場は色々あるが、僧侶であれば、檀信徒などに訴えることが大切。
- ・かつての富国強兵の方針は間違ってた。核兵器も持つべき。
- ・個人的には家族は守りたいが、僧侶として人は殺したくない。その思いの間で揺れ動いている。
- ・守る為に武力を持つという意見はあるが、まず戦争を起こさないためにどうすればよいかと考えるのが、石橋湛

山の考えであり、僧侶のすべきことだと思う。

・湛山先生にあり、我々お坊さんに欠けているのは、リアリズム。我々はもつと社会のことを知り、データを基に現実を分析して、しっかりと現代に対応していかなければならない。

座長

皆、平和が良く、戦争はしたくないという気持ちは一致している。ただ、その過程において、護憲であるとか改憲であるとか集団的自衛権云々など、戦争にならないようにするための方法論が違ってきている。

二日目

一日目に安倍首相の「戦後七十年談話」を配布し、二日目にはその感想をポストイットに書いて来てもらった。近い意見を纏めて分類し、その中から意見の多かったテーマについて討論した。

「積極的平和主義、安保、集団的自衛権」

・「積極的平和主義」という言葉の定義が曖昧で、どうとでも解釈できることが怖い。

・積極的平和主義は、武器の保持と行使を考えている証だ。

・国際社会の責任を今まではODAなどで果たしてきたが、これからは集団的自衛権の行使による協力が必要になる。

・戦争はしません、したくありません、しかしある程度の武器をもつてないと舐められて侵略される。守れるようにしなければならぬ。脅す意味でも集団的自衛権は必要。

・個別的自衛権は既にあるし当然良いが、集団的自衛権だと他国の戦争に巻き込まれる恐れがある。

・集团的自衛権が行使された時に、我々僧侶としての対応を考えなければいけない。

〔平和〕

- ・そもそも平和とは何か。平和の意味する内容と方法が問題。
- ・殺し殺された英霊が居たから、今の日本の平和がある事だけは忘れてはいけない。
- ・侵略をしない、戦争をしないだけでは、他国には通じない。自衛が必要。

〔謝罪〕

（続けるべき）

- ・ドイツは、相手が許すまで謝り続けている。
- ・謝罪することで、道義的に上位に立つことができる。
- ・形骸化したとしても、外交辞令として謝罪を続けていく姿勢を持つことが国際関係においては必要であり、今後の平和につながるのだと思う。

（続けなくてよい）

- ・謝罪はもう十分おこなってきた。
- ・当時の戦争経験者はほとんど残っていない。それなのに、いつまで謝罪を続けなければならないのか。
- ・異文化の相手に、どれほど謝罪すればいいのか、基準がわからない。
- ・釈尊の言うように、怨みは忘れることでしか消えない。
- ・アメリカは、原爆を投下してから七十年間、一度も謝罪してない。

・謝罪の問題は、外交問題であり、政府が解決すること。我々僧侶のやることではない。

「国際関係、外交」

- ・日本が海外で行った貢献や謝罪が、他国の国民に伝わっていない。
- ・国家と国民は違う。国家が対立しているならなおさら、民衆間の交流を促進していかなければ。
- ・民族や宗教の違いは本来、戦争する理由にならない。異民族異宗教間の交流が必要。
- ・アメリカでなく、国連の強化正常化が必要。

「僧侶のやるべきこと」

- ・国と国民は別であり、国でやるべきことと、国民や僧侶がやるべきことを分けて考えるべき。
- ・戦争の体験を語り継ぎ、平和の大切さを訴える。
- ・僧侶は武器を持って戦うのではなく、祈るのが仕事。
- ・憲法を生かすも殺すも人間があつての事。人間の価値観を底上げし、法華経の価値観をもった人間を育て、世界平和の思想を輸出することが、我々僧侶がやるべきこと。
- ・状況はどうあれ、戦争を回避する方法を考え、そういう視点を提供する立ち位置にいななければならない。
- ・「戦争を知らない子供たち」の歌詞のように、皆が「笑顔で誰でも一緒に歩いて行こうよ」という気持ちになれれば、戦争は起きない。戦争をなくすために、お題目を広めて、少しでも笑顔を増やしていきたい。

三、まとめ

二日間にわたり、積極的平和主義、安保、集団的自衛権、平和、謝罪、国際関係、外交、僧侶のやるべきことなど、多数のテーマについて、様々な立場から多くの発言があり、活発な議論が行われた。

どのテーマ一つとっても、多数の重大な論点を含んでおり、論点が絞り切れずに議論が深まらなかったのは残念であった。例えば、重要なテーマの一つに「平和」があったが、自分一人の平和なのか、友人知人の平和なのか、日本や世界の平和なのかなど、人により平和の定義が異なり、議論がかみ合わない場面も見られた。また、平和の実現手段についても、武力の行使を否定して武力の放棄を主張したり、自衛のための武力を容認したり、平和とは勝ち取るものだと言う意見まであった。

ただ、平和に至る過程において方法論は個々人で異なっても、平和が良く、戦争はしたくないという気持ちは一致しており、平和を実現するのが僧侶の役目であることは確認された。

また本分科会では議論の進め方として、一日目に資料を配布して二日目についての意見を聞くという方法を採用したが、資料を読み込む時間を一晚取れた事により様々な意見が提示されており、非常に有効な手法である事が確認された。

第三分科会

湛山の「豊かさ」と戦後七十年——新たな格差の中で——

座長 鶏内泰寛

問題提起 松田英秀

助言者 中村潤一

記 録 池浦英晃 津幡法胤

運 営 鈴木是妙 延本妙泉 齋藤宣裕 山田孝行

第三分科会は今回の中央教研のテーマである「石橋湛山とその時代——戦後七十年、立正安国の教化を考える」を受け、戦後社会の「豊かさ」という問題と近年、克服課題として関心の高まっている「現代の貧困・格差問題」に焦点を当てた。

湛山の活躍した時代、戦後高度成長のなかで求められ、とらえられた「豊かさ」は現代われわれの考える「豊かさ」と共通のものなのか、異なっているのか。まず、戦後の社会のあゆみをスライド画像などを使って振り返りつつ、参加者自身が自らのあゆみを「自分史年表」を作成することで確認してもらった。そこから社会問題として、日々の教化活動のなかから見える身近な問題としての視点から、「豊かさ」と「貧困・格差」について認識を深くすることを目的とした。ちなみに、今回、第三分科会は運営スタッフを含め三十三名の参加を得た。

一、問題提起

昭和二十年終戦。戦後の荒廃の中で、全ての物が不足し、食べ物を手に入れる事すらままならず苦しむ人々を目にした石橋湛山は、国と国民を救済すべくジャーナリストから政治家へと転身し行動を起こした。湛山は現実主義に徹し、国の再建と国民が窮乏から脱出することを最優先課題とし、当時の絶対的権力を有するGHQにも臆する事無く堂々と相對し、公職追放されても一歩も引くことなく様々な形で自らの理想を実現するために行動している。そこにはまさしく心底に日蓮聖人の目指した衆生救済、「立正安国」の精神があつたのではないだろうか。

湛山が作つた高度経済成長のシナリオは、その後の池田内閣の所得倍增計画に繋がっていき、日本は世界でも稀なほどの急速な経済成長を遂げていく事となる。この高度経済成長に伴って、たしかに日本は豊かになっている。然しながら現在の社会を見ると、この七十年間の激的な社会の変容は様々な形で歪みを生じ、一見豊かにみえるのだが、その実大きな問題を抱えている。

湛山の時代に求められた「豊かさ」は端的にいうならば物質的な「豊かさ」が優先であつた。その反面、それに伴う弊害が多く発生し、環境破壊であつたり、水俣病に象徴される公害病であつたり多岐にわたつた。

現在、国民の豊かさを示す指標の一つであるGDPでみると日本は世界で十八位である。然し、貧困ラインの引き方として採用されている相対的貧困(格差の大きさを表す)という尺度でみるとOECD(経済協力開発機構)加盟国の中でトルコについてワースト六位であり、アジアの中では一位である。富裕層もいる反面、実に国民の十六%、六人に一人が相対的貧困状態にあるのである。

この格差は個人にだけではなく、地域自治体にもある。二十五年後には全国の自治体の四十九.八%が消滅する可能性があるといわれている。また、家族制度も大家族から核家族、さらに個の単位に変化してきている。

こうした問題を抱えながらも、今ある物質的な豊かさは湛山が目指したところである。そして、その豊かさは戦後七十年間続き、私たち「自分」もその恩恵のなかで生きてきた。そこで、今回の第Ⅲ分科会では、戦後から今まで起こってきた主な出来事を年表で確認し、その中にある「自分」を感じてもらうために自分史を実際に作成する作業を試みる。

今では、格差の中で、自身の将来展望を描くことができず、ある意味「豊かさ」を求めず、消費せず、堅実で高望みをしない「さとり世代」と呼ばれる若者たちが生まれてきた。現代においては湛山の時代の「豊かさ」とは異なる「豊かさ」が求められ、必要とされているのではないか？「豊かさ」とは何なのか？「格差」とは何なのか？

我々は日蓮聖人の直弟子として、苦悩する人々にどの様に向き合い、何をするべきなのか？共に考えていきたい。

二、分科会討議について

【一日目】

まず、日本の戦後を振り返る試みとして、運営側が作成したパワーポイントによるスライドショーを参加者の方々に観覧してもらった。戦後のその年ごとの主な出来事を、数枚ではあるものの映像で見ってもらうことにより、「共有の記憶」として私たちが辿ってきた戦後のあゆみを振り返る。

また、第Ⅲ分科会参加者には事前に「自分史記入年表」を送付しておき、自分の履歴などを参照しながら、誕生～現在までの出来事を年表のなかにあらかじめ書き込んでもらうよう依頼した。この年表の内容は分科会のなかでとくに取り上げる材料とはしなかったが、「度課」や「信行道場入場」など自分自身に関わる重要事が、社会の出来事や宗門の動向と関連づけられることにより、日蓮宗教師としてのあゆみも確認してもらうことを願ったものである。「個の記録」として自身の歴史を考えるきっかけとなったかもしれない。

以上のようなスライド観覧、自己確認を行ったのち、「豊かさとはなにか」という質問を投げかけ、一人ひとりからお話し頂いた。自己紹介を兼ね、それぞれ発表して頂いたが、日々の教化において感じていること、寺を取り巻く社会的環境の変化や関心ごとにも話がおよんだ。

・お寺に関わって三十年くらいになるが、檀家さんのなかの「豊かさ」への考え方が相当変化した。そして、家族形態の変化、働き方の変化という経済的要素が信仰の継承にも影響しているように感じられる。

・「次世代に負担掛けたくない」という人が増えた。あらゆる仏事において「お金基準」の価値観が浸透しすぎてはいないか。

・お坊さんは地域からどう見られているかに関心がある。お坊さんの価値観も世間とズレているのではないかと感じる。

・自分の町の人口が減り続けている。新しい布教の切り口となるようなヒントが欲しい。

・戦後七十年経ってみて、その時代々々に対応した先師の働き、教化の変遷も学ばねばいけないのではないか。

・限界集落化の進行が著しい。離檀も相当に増えている。

・月回向等で、高齢者の檀信徒さんから戦前の話をよくうかがう。貧しい時代の話に学ぶものが多い。

・「豊かさ」には「心の豊かさ」と「モノの豊かさ」という相対する二つの考え方がある。

・「目に見える豊かさ」と「目に見えない豊かさ」という視点もある。

・地元の消防団に属しているが、「坊さんは何をしているのか」と問われる。

・社会問題のひずみがお寺にも影響している。どうやってお寺は変われるのが重要。

・「金銭的な豊かさ」と「主観的な豊かさ」（充足感）、そこに僧侶はどんな貢献ができるのが問われている。

・お寺自体がコミュニティの中核になるようなあり方。それこそが私たちができる「豊かさ」づくりだと思う。

・決して経済的に余裕があるとは言えないお檀家さんだが、その供養の気持ちの強さや素朴な信仰の姿勢にふれて学ぶことが多い。

・最近、心の温かさにふれ、「豊かさ」を考え直すときと感じた

・月回向の際、独居高齢者の方々と話すときと表情が明るくなる。こういう信仰のやりとりこそが「豊かさ」ではないか。

・「豊かさを与える」という独善的な僧侶側の気負いは不要。小さな事をコツコツやり、地域のなかのひとりとしてどう生きるのが大事。

・「健康」でいられるということも「豊かさ」のひとつである。

【二〇四】

二日目は、前日の「豊かさとはなにか」の問いへの回答を確認したのち、座長より戦後の「経済格差」の動向を示すデータが示された（「社会階層と社会移動調査（SSM調査）。一九五五年から十年毎に行われている「社会階層と移動」あるいは「社会的不平等」を主題とし、分析研究したもの）。

また、世界的に比較されたOECDによる我が国の「相対的貧困率」を示すデータも同じく示された。以上のデータを知識として得、または手がかりとして、今度は「社会や檀信徒と接するなかで格差を実感しているか」という質問で討議をお願いした。

・市町村による格差が大きいと感じる。また、行政の対応も市町村でまちまち。

・市の仕事などにも関わっているが、福祉が不足している。お寺が助けを必要としている方々に福祉的な面で何ができ、対応できるのかが問われる。

・小中学生が行う全国一斉テストというものがあるが、全国の順位が発表される。教育の格差が顕著。

・有効な医療措置を受けられる人と受けられない人がいる。医療格差が確かに存在している。
・福島原発の問題が未だ収束をみないなか、高齢化し困窮したある地域では、「原発を誘致すれば地域が活性化する」と考える人さえいる。

など、おもに社会的にも議論されているような「格差」の問題が語られた。議論の尽くさないところもあったが、グループワークにより、「豊かさ」、「格差」についてより深い討議をしてもらうため、次の作業に移った。

「グループワーク」

参加者の方々にはだいたい近い年齢で年代別となるようにグループになってもらい、発表を最終目的とした議論を行ってもらった。テーマを二つ設定し、一日目、二日目の討議を踏まえた上で、①「豊かさ」とはあらためてなんだったのか？」と②「格差」を乗り越える方策とは？」について模造紙に書き表してそれぞれのグループに発表してもらう。

グループには、議論と発表の方法として「マンダラート法」を用いてもらった。マンダラート法は企業や学校などでも活用されている発想法のひとつである。自由で柔軟な発想によるアイデアを出すことを目的としたものである。以下、少しだけそのやり方を説明する。

「マンダラート法」

1. まず、模造紙を折り、三×三＝九つのマス目をつくる。

2. 中央のマス目にテーマを書く。

3. 周りの八つのマスを中心に書かれたテーマに関連したキーワードや短文で表現したものを思いつくままに書いていく。

4. 八つのマス目は必ずすべて埋まるまでアイデアを絞り出してもらおう。

すべてのキーワードや意見を載せることはできないので、挙げられたものをいくつか記しておきたい。短時間でしかも思いつくままに出たものをグループ内で選び出されたものなので、その点はご了解頂きたい。

① 「豊かさ」とはあらためてなんだったのか？

安心する思い、経済面での充実も心を満たす、お金、食、仕事、やりがい、社会的欲求、家族が元気で過ごせること、信仰心、娯楽、「少欲知足」、健康、心の余裕、友人関係…
(順不同)

② 「格差」を乗り越える方策とは？

選択肢の多様化、互いの存在の尊重、教育、知識、社会的弱者の立場を知る、信仰、社会的ネットワーク、必要な福祉へ導く情報、環境、心…
(順不同)

年代別に分かれたグループの大きな傾向としては、「信仰」を挙げたのはすべての年代で共通であったが、二十代のほうが金銭的なものと仕事のやりがいなどのバランスが重要であるという意見で現実的な側面が強く、三十代、四十代になるとそれらに友人や仲間といったネットワーク・つながりが加わってくる。五十代になると宗教心や健康が

キーワードとして挙がってくる。とくに年代別によってとらえられる「豊かさ」の範囲に少し違いが出てくるという点が見られた。

参加者の方々には発表披露まではして頂いたが、それらのキーワードをもう一度議論し、煮詰めるまでの時間を提供できなかったのが残念であるが、真剣に二つのテーマについて話し合ってもらった。

二、まとめに代えて

会を閉じるにあたって、顧問の中村潤一師より、基調講演のなかで早川誠氏が引用された石橋湛山の「宗教人の義務をもって、社会にその義務を果たす」という言葉があったことを指摘され、この言葉を心に留めつつ、それぞれが自分の教化の場で「豊かさ」や「格差」について考えていくことを勧められた。

会議においては、人々が求める「豊かさ」が、「物質的豊かさ」から「精神的豊かさ」へすでに移行しているという共通認識もあり、言及がなされていた。私たち僧侶が「宗教人」としてその求め、望みにどれだけ応えられるのかが問われていると思う。

石橋湛山は終戦の昭和二十年、戦後の食糧難にあえぐ国民に次のような言葉を送った。そこに湛山の厳しくも温かい励ましを見る思いがする。

「皆が等しくひもじい思いをするも、一杯の飯を半杯ずつ国民互いに分ち合う犠牲の精神がまずなくては、日本再建の大業は成し遂げえない。…当面の食糧難の打開にいかにもその犠牲の精神が発揚されるかは、かくて日本の前途を卜する第一の試金石である。」
（『当面の食糧問題』『石橋湛山全集』第十三卷六七頁）

第Ⅳ分科会

法華経に生きた人たち——石橋湛山と石原莞爾—— 記録

座長 河崎俊宏

問題提起 野村佳正

助言者 田澤元泰

記録 小林康洋 原一彰

運営 坂輪宣政 馬渡竜彦 石原顕正

一、問題提起

本分科会は石橋湛山の間人像をより明確に分析するため、同時期法華経に生きた人との比較を試みる。

その比較の対象として、満州事変の立役者といわれる関東軍作戦参謀陸軍大佐石原莞爾を挙げる。なぜなら、戦間期の時代の日本で、社会に少なからぬ影響を及ぼしたと考えられるのが、アジア主義的イデオロギーであるが、石原莞爾は深く法華経に帰依して、その影響からアジア主義と軍事理論について確信を深めていったと考えられるからである。このアジア主義的イデオロギーは石橋湛山の小日本主義に通じる。アジア主義者である石原莞爾は満州国の指導を巡り統制主義者である東条英機と鋭く対立したのであった。ところが、石原莞爾が自ら打ち立てた満州国の指導を、実際に行ったのは、東条英機であり、岸信介であった。石橋湛山もまた首相就任直後、脳梗塞の発症からライバ

ルたる岸信介に政權を渡しており、ここにも共通性が見いだされる。最後に、石橋湛山も石原莞爾も、戦後において非武装論を提唱する。これらの共通性から、容易に想像できることは、石橋湛山の時代にはある共通の法華経信仰があったのではないだろうか。

これを比較するため、石原莞爾の国体主義、アジア主義、軍事理論を説明し、後継者の比較も交え、参加者の意見をまとめる。

二、湛山・莞爾略年譜の解説

三、分科会討議について

本分科会では、石橋湛山の思想、人物像をより深く理解するために、法華経信者としての共通点を持つ同時代人、石原莞爾との比較を行った。参加者がより精緻に両者を比較検討できるよう、受付時にワークシートを配布し、基調報告、基調講演、並びに分科会での討議を通じて、以下の論点について、それぞれ石橋湛山、石原莞爾、参加者自身の考え方をまとめる作業を行った。

- ・ワークシートの論点（石橋湛山／石原莞爾／参加者自身）
- 1 法華経をどのように受け止め、信仰していたか
- 2 国の経済発展の在り方をどのように考えていたか
- 3 理想のアジア像はどのようなものだったか

- 4 国の安全保障の在り方をどのように考えていたか
- 5 天皇制をどのように捉えていたか
- 6 現在の日本に生きていたら、どのように考え、行動していたか

四、分科会の進め方

一日目は、基調報告、基調講演及び分科会の問題提起と湛山・莞爾略年譜の解説を聞きながら、各自ワークシートの作業を進め、主として問題提起者への質疑応答を中心に両者への理解を深めた。

二日目は、各自のワークシート作業結果に基づきながら、論点ごとに議論を進めた。また、現宗研の池浦英晃研究員が山形県鶴岡市の石原莞爾墓所を参拝した際に撮影した画像を紹介しながら、戦後、最晩年の石原莞爾の思想について補足説明を行った。

五、参加者の意見（一部を抽出）

1 法華経をどのように受け止め、信仰していたか

〔石橋湛山〕 幼少時より法華経と日蓮聖人の教えを学び、祖師の三大誓願を生き方の根底に置きながら、ジャーナリスト、政治家として、現実社会の中で仏国土顕現を目指していた。ジャーナリスト、政治家として現実主義者であると同時に、法華経信仰に基づく理想主義者でもあった。

〔石原莞爾〕 国柱会、田中智学の思想に共鳴し、久遠実成の本佛と万世一系の天皇を結び付け、法華経による理想世界の実現を目指していた。日蓮聖人のご遺文（前代未聞の大闘争）により、日本と西洋世界の最終戦争の勃発を信じ、備えようとしていた。

〈参加者自身〉 立正安国、浄仏国土の顕現を目指す。法華經の理解と実践、檀信徒への布教。法華經の教学を基に現実の社会問題に対応。

2 国の經濟發展の在り方をどのように考えていたか

〈石橋湛山〉 小日本主義、貿易立国、満州放棄論。現実的な市場主義經濟論者。經濟發展は国民の幸福の基。現実主義的衆生救済。

〈石原莞爾〉 満州領有（資源獲得）、大東亜共栄圏の確立による国の經濟的繁栄。

〈参加者自身〉 經濟の發展は国の平和、個人の平和のため。資源小国日本が生き残るための世界平和。市場經濟にも倫理的バックグラウンドは必要。經濟的豊かさとは宗教的豊かさは区別すべき。經濟格差がなくなる經濟發展。足るを知ることから始まる消費經濟。

3 理想のアジア像はどのようなものだったか

〈石橋湛山〉 全世界と協調。各国が主権を保ち共存共栄。植民地から解放されたアジア。アジア全体で平和を考える。

〈石原莞爾〉 日本主導で大東亜共栄圏建設。五族協和、八紘一宇、王道樂土。日本が盟主となってアジアを統一し欧米に対抗。東洋的道義心に基づく法華經的ユートピアの建設。

〈参加者自身〉 民族、文化の違いを認め合うアジア。共に發展していくアジア。自立し互いに干渉せず、相互補完。未来志向。仏教の平和思想を広める。

4 国の安全保障の在り方をどのように考えていたか

〈石橋湛山〉 日中米ソ平和同盟。集団の安全保障による軍縮、非戦平和。戦後、再軍備による抑止力。戦争を最小限に抑えるための自衛力。現実的平和主義。帰結的平和主義。

〈石原莞爾〉 最終戦争論。植民地拡大により本土を守る。アジア共栄のため統一アジアの自衛。理想的平和主義。戦後は非武装論、永久平和。

〈参加者自身〉 国と国との外交による平和。仏教による絶対平和実現のため、諸国、諸宗教と協力。平和の維持のためあらゆる手段を使う必要がある。米国との安全保障のみではなく国連が機能した安全保障。

5 天皇制をどのように捉えていたか

〈石橋湛山〉 日本国の祖霊。万世一系。思想的には法華経信仰と分けてとらえている。現行憲法の象徴天皇制を受け入れているのでは。

〈石原莞爾〉 久遠実成の本佛と万世一系の天皇の一致思想。天皇第一主義。天皇＝転輪聖王、したがって日本が盟主となるべき。

〈参加者自身〉 現行憲法に従う。日本国の象徴として大切。ご遺文通り日本国の国主。日本で一番古い家系。文化的中心。天皇は統治者であり久遠本佛は救世者であるから一体ではない。日本の平和のシンボル。天皇の本佛信仰が必要。

6 現在の日本に生きていたら、どのように考え、行動していたか

〈石橋湛山〉 プラグマティックに行動。国民生活を念頭に置き、現実に即した合理的主張。国連で活躍。理想実現

のために実現可能な政策を選択。軍備は必要。現実的平和主義者。国際協調を基に未来に向けた平和主義。法華経を基に国民の安穩を目指す。

〔石原莞爾〕 晩年の法華村構想のような武器を捨てた平和主義。法華経を基にした世界平和統一思想。非武装中立。求める理想のために邁進。各地を講演して回る。核廃絶に向けソフトパワーで働きかける。理想主義者であり続ける。法華信者としてより崇高な思想を残したのではないか。

〔参加者自身〕 信仰に基づいた生活。法華経信仰を基に社会現象に対応。人々の近くで人々を癒す、宮沢賢治のような僧侶。情報に惑わされない。宗祖の三大請願をもって生きる。理想の実現に向け可能な範囲で実践。自分自身で法華経と遺文を読み理解する。現実を踏まえ、理想を目指す。

六、まとめ

ほぼ同時代を生き、ともに法華経を信仰していた二人でありながら、全く異なる思想と行動で知られる石橋湛山と石原莞爾。二日間にわたり、六つの視点から二人を比較することにより、二人の人物像、思想への理解をより深めていくという当初の目標は、参加者の発言、感想から、概ね達成されたと考えられる。特に、満州事変の立役者である石原莞爾が、戦後、郷里で平和主義者として晩年を過ごした事実は、参加者に強い印象を与えていた。

参加者の共通の理解として、二人には、法華経への深い信仰、立正安国、衆生救済という高い理想、さらに理想を実現するために現実社会で具体的な活動を積極的に行った、という共通点を確認できた。

翻って我々は二人のような深い信仰や高い理想を保ち、現実社会への積極的な働きかけを行うことができているであろうか、という自省の念を共有できたと言える。この自省の念は、今後の我々自身の生き方を見つめ、檀信徒への教化を続けていく上で、大きな糧になるものであろう。



〈写真1〉『石原莞爾肖像レリーフと永久平和、「都市解体 農工一体 簡素生活」の三原則』（鶴岡市・池浦英晃研究員撮影）

*新日本建設の三原則…石原莞爾の目指した戦後日本復興を端的に表した理念。各標語の大略は次のとおり。（昭和22年『新日本建設大綱』より）

- ・都市解体 空襲による甚大な被害を教訓とし、誘惑と弊害の多い都市文明、集約型社会から脱する。人口、企業、工場の地方分散を進め、文化の偏在、都市と農村の相克対立を解消する。
- ・農工一体 各家庭の主労働力は工業などの職に従事し、家族労働力をもつて自家食糧を生産する。また地方が主動して都会人を受け入れ、土地解放を果敢し、国民皆農の社会を目指す。
- ・簡素生活 生活刷新により人間の優れた直感力を回復し、剛健な身体、謙虚なる人格を養なう為の絶対条件。徹底して無駄を廃し、余財を交通・通信といった高度な科学の発達に資する。



〈写真2〉 『私はただ仏さまの予言と日蓮聖人の霊を信じているのです』 石原莞爾（鶴岡市・池浦英晃研究員撮影）